

# 「銀河鉄道の夜」を読む (I)

## A Study of Night Train to the Stars (Part I)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

はじめに

宮沢賢治の代表作とされる「銀河鉄道の夜」は、テキスト決定の困難な作品となっている。一九二四(大正一三)年夏から一九三三(昭和八)年の没年まで、ほぼ十年間、繰り返し改稿された。第一次稿から第四次稿までが現存し、それぞれが存在を主張している。作者生前未発表、しかも未完成作品ゆえ、決定稿は決め難い。強いて言うなら、その折々の定稿が未発表で残ったのである。

『新校本宮沢賢治全集』は、第一次稿から第三次稿までを第十巻に収録し、第十一巻には、作者が晩年の一九三二～二年頃、さらに大幅に加筆した結果成立した第四次稿を収録している。第十一巻の校異篇には、加筆・省筆の様子が細かに検討され、「銀河鉄道の

夜」推移概念図」という第一次稿から第四次稿への変化の様子(改稿過程)を明示したもので付す。そこで、ここではこれら新資料の世話になりつつも、原子朗が『鑑賞日本現代文学』<sup>13</sup>宮沢賢治<sup>14</sup>で説くように、まずは最終形の第四次稿を味読するところから出発し、「初期形」とされる第三次稿をはじめ、一部が残る第一、二次稿をも適宜参照するという形で、論を展開することにする。

なお、第一次稿から第四次稿に及ぶ四つの「銀河鉄道の夜」に關しては、西田良子の「四つの「銀河鉄道の夜」——改稿にみる創作意識の変化」<sup>2</sup>にくわしい。その論の「おわりに」で西田は、「くり返し行われた「銀河鉄道の夜」の改稿は、決して最終稿完成のために行われた推敲ではなく、賢治の創作意識の変化によって、その都度「銀河鉄道の夜」は、新たな「銀河鉄道の夜」に変貌して行ったということである」という傾聴してよい見解を示す。そうした考えを十

分吸収しながらも、ひとまずは第四次稿を対象に、そのテキストの構成を見ることにしたい。

テキストはジョバンニという孤独な少年を中心に展開する。父は北方で漁を置いて留守、母は病気がちという不幸な条件のもと、少年ジョバンニは勉学に励む。彼は星祭りの夜に、慕っている友人カムパネラと銀河鉄道をめぐる夢をみる。が、夢から覚めて現実に戻ると、カムパネラの犠牲の水死を知らされる。最終形の「銀河鉄道の夜」の章立てと、それぞれの章のおおよその枚数(四百字詰原稿用紙)を示すと以下のようである。

- 一、午後の授業(五枚)
- 二、活版所(三枚)
- 三、家(六枚)
- 四、ケンタウル祭の夜(九枚)
- 五、天気輪の柱(三枚)
- 六、銀河ステーション(九枚)
- 七、北十字とプリオシン海岸(十二枚)
- 八、鳥を捕る人(十二枚)
- 九、ジョバンニの切符(六十枚)

『新校本宮澤賢治全集』は、章を示す数字の前後を「」で括り、数字の後に読点を打つなど、テキスト再生の工夫が凝らされている。が、ここでは『新修宮澤賢治全集』に倣い、右のような簡明な表記に統一した。

章立てのタイトルと原稿枚数にざっと目を通して、かなりアンバランスであることがわかる。最終形(第四次稿)「銀河鉄道の

夜」は、書き込みを加算し、おおめに見て百二十枚ほどの分量である。そうした枚数のテキストにあつて、二章と五章のように原稿用紙三枚という長い長い章があるかと思うと、九章のように六十枚という長い長い章もある。九章は百二十枚ほどの第四次稿「銀河鉄道の夜」の何と半分を占めるのだ。整合性が問われても致し方あるまい。作者宮澤賢治は、最終章に相当する「九、ジョバンニの切符」の章を細分化し、章立てをもっとすっきりさせたかたに違いない。また、三や五の章をふくらませ、他の章とのバランスをとりたかつたらう。第一次稿から第四次稿まで変わらないのは、孤独な少年ジョバンニが、ケンタウル祭という銀河の祭りの夜、友人カムパネラと銀河鉄道に乗って旅をし、一人現実世界に舞い戻るというプロットである。

本作が未完成作品であることは、右に見たようなテキストの分量配分という点からしても言える。けれども基本的にはテキストは成立している。そこで、以下にひとまず第四次稿をもとに、「銀河鉄道の夜」を読み進めることにしたい。

### 一 授業風景

第四次稿「銀河鉄道の夜」は、次のような授業風景からはじまる。テキストの冒頭「一、午後の授業」である。『新校本宮澤賢治全集』から引用する。

「ではみなさんは、さういふふうに川だと云はれたり、乳の流

れたあとだと云はれたりしてゐたこのぼんやりと白いものがほんたうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帯のやうなところを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげやうとして、急いでそのまゝやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないといふ気持ちをするのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかつてゐるのでせう。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが立つて見るともうはつきりとそれを答へることができないのでした。ザネリが前の席からふりかへつてジョバンニを見てくすつとわらひました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になつてしまひました。先生がまた云ひました。

「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でせう。」

やつぱり星だとジョバンニは思ひましたがこんどもすぐに答へることができませんでした。

教室の授業風景は、天の川の説明にはじまる。天の川（銀河）とは、銀河系の渦巻きの周辺が、地上からは、天上を流れる川のように見えることからきた名である。銀河を川に見立てることは世界共

通のようである。先生は黒板に大きな黒い星座の図を吊し、「上から下へ白くけぶつた銀河帯のやうなところを指しながら」説明し、問いかける。教室には先生の他にジョバンニとカムパネルラとザネリなどがいる。テキストを支える三人の名が、早くも登場する。カムパネルラが先ず手をあげる。それから他の級友四五人が続く。ジョバンニも手を挙げようとするが、自信がない。それがみんな星だということは分かつていながらである。テキストの語り手は、ジョバンニの手のあげられない理由を、「毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないといふ気持ちをする」からだと語る。

先生はジョバンニが消極的なを見抜き、「ジョバンニさん。あなたはわかつてゐるのでせう。」と問う。その後の叙述は、ジョバンニの苦しみをよく語つてゐる。ザネリといういじめっ子の登場も印象的だ。「ザネリが前の席からふりかへつてジョバンニを見てくすつとわらひました」の一文は、その後のザネリの役割を暗示しているかのようだ。先生は助け舟を出し、「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でせう」とまで言つてくれるのだが、自信を失つたジョバンニはそれが星だと分かつていても、答えられない。教室での生徒の心理をよくつかんだ描き方だ。

この後、先生は眼をカムパネルラに向け、「ではカムパネルラさん」と名指しするとカムパネルラも、もじもじ立ち上がったまま、答えない。ジョバンニのことを慮つてのことであつた。先生には全てが分かつていたのであろう。急いで「ではよし」と言いながら星座を指し、望遠鏡で見ると、それはたくさんの小さな星に見えるのだと言ひ、「ジョバンニさんさうでしょう」と同意を求め。ジョ

バンニはなぜ素直に答えられなかったのか。テキストは次のように続く。

ジョバンニはまっ赤になつてうなづきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいっぱいになりました。さうだ僕は知つてゐたのだ、勿論カムパネラも知つてゐる、それはいつかカムパネラのお父さんの博士のうちでカムパネラといつしよに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどころでなくカムパネラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書「齋」から巨きな本をもつてきて、ぎんがといふところをひろげ、まっ黒な頁いっぱい白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかつたのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネラともあんまり物を云はないやうになつたので、カムパネラがそれを知つて気の毒がつてわざと返事をしなかつたのだ、さう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネラもあはれなやうな気がするのです。

ここでジョバンニが、なぜ先生に素直に返答できなかつたが明かされる。ジョバンニとカムパネラは気が合う仲のよい友だちだ。それ故先生の質問に答えられなかつたジョバンニを、カムパネラは見捨てない。そして自身も答えないことで、ジョバンニに救いの手を差し伸べたのであつた。ジョバンニがなぜ知つていながら先生の間へすぐ返事が出来なかつたかは、「朝にも午后にも仕事がつ

ら」かつたためであり、勉強に身が入らないことからくる自信喪失にあつたとされる。ジョバンニのサイドから語る語り手は、ジョバンニの肩を持ちながら、その苦澁な心境を検証する。カムパネラが先生に問われて答えなかつたのは、自分を「気の毒がつてわざと返事をしなかつたのだ」と考へるジョバンニの気持ちも推し量られている。「じぶんもカムパネラもあはれなやうな気がする」とは、共同体意識に目覚めた者のことばである。

以下に述べられる天の川に関する先生の説明は、要を得ている。天体に関心の深かつた賢治は、屋根の上で星を観察したり、星座の模型を眺めたり、星座表をいつも携えていたという。そうした作家の関心がよく生かされている。授業は理科の時間で、課題は天の川であつたことも明かされる。「天の川がほんたうに川だと考へるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考へるならもつと天の川とよく似てゐます。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんである油脂の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云ひますと、それは真空といふ光をある速さで伝へるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮かんでゐるのです。つまりは私どもも天の川に棲んでゐるわけです」という銀河の説明は、太陽系を巧みにとらえた上での発言である。しかも、銀河を牛乳の流れにたとへることで、続く箇所での牛乳との関連が生じることになる。

一の章の終わりに、「では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんさい」という一文が書き込まれている。理科の時間は「銀河のお祭」（ケンタウル祭）とかかわ

り、子どもの関心と深く交差するよう考えられたものだったのである。すぐれた授業である。

さて、ここで早くも登場した三人の子どもに光をあてよう。まずはジョバンニである。その命名は、『新約聖書』に登場する洗礼者ヨハネ、それに「ヨハネによる福音書」の記者であり、三つの「ヨハネの手紙」および「ヨハネの黙示録」の著者で、十二弟子の一人、ゼベダイの子ヨハネにあやかるのではないかとの連想を呼ぶ。もともとヨハネ (Johannes) は、キリスト教国において、もつとも多い洗礼名である。ジョバンニは、そのイタリア語 (Jovanni) の読みである。

『新宮澤賢治語彙辞典』<sup>③</sup>には、「ジョバンニ」の項目があり、中に「銀河鉄道の夜」の場合、十字架や讚美歌 (→Nearer My God)、神をめぐる議論、ハルレヤの唱和、ラッパの声、神々しい白いきものの人など、銀河鉄道のめぐる天上界は美しいキリスト教的イメーヂに彩られており、それが「ヨハネ黙示録」の新天地の幻想的な描写 (童「銀河鉄道の夜」に鳴り響くドヴォルザークの「新世界交響曲」の影響源でもある) と深く結びついていることを考えると、迫害によりパトモス島に流され、その地で黙示的幻想を見てこの書を記したとされる使徒ヨハネが、賢治のジョバンニ命名の念頭にあったと考えることができよう」の言及がある。「銀河鉄道の夜」は、作者賢治が深く信仰した法華経よりも、キリスト教の世界に近いのである。そのことは追いつ追いつ述べることにしたい。

次にカムパネルラの命名は、イタリアの哲学者で詩人であった Campanella, Tommaso (一五六八―一六三九) によると考えられる。カムパネルラは、近年の『岩波キリスト教辞典』<sup>④</sup>によると、「神政

政治が行われる理想的な共産主義社会を描いた『太陽の都』(一六〇二)の著者として知られる」とあり、さらに「異端の嫌疑をうけナポリで宗教裁判にかけられた。その後パトヴァに移ったが、ここでも宗教裁判所に捕らえられ、やがてローマに送られた」とある。以後も反乱の罪で捕らえられ、長い獄中生活を余儀なくされている。『新宮澤賢治語彙辞典』では、カムパネルラの命名として、他に教会堂の側に立つ鐘塔を Campanella ということから、これもヒントとして考えられるとある。本作のキリスト教的雰囲気は、登場人物の命名に早くも顔を出しているのである。

「一、午後の授業」に出て来るいま一人の少年ザネリの命名は、どこからくるのか。『新宮澤賢治語彙辞典』には、「その名の出所は、バリトン歌手 R・ザネリ (Zanelli) がヒントになっているのかもれない」とあるが、推定の域を出ない。聖書の人物でないことは確かである。賢治のことゆえ、何かに着想を得ているだろうことは確かだが、今のところはつきりしない。ザネリはどこにもいる意地悪な子、いじめっ子である。「一、午後の授業」では、後にザネリが演じる大きな役割を、それとなく暗示している。ここまですぐテクストの導入とも言えそうである。

## 二 ジョバンニの孤独

テクストは、次にジョバンニの孤独をとりあげる。第四次稿の二、三、四の章が相当する。二には「活版所」のタイトルが添えられ、放課後の風景がまず描かれる。「星祭り」の準備だ。「ジョバン

ニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところを集まっていた。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談しかつたのです」にはじまる。「星祭」というのは、四の章のタイトルともなる「ケンタウル祭」のことである。ケンタウルとは、星座のケンタウルス座のことで、夏の夕方、南の地平線上に上半分が見える星座である。子どもたちは今夜の星祭に、川に流す烏瓜を取りに行く相談をしている。

が、ジョバンニは彼らの仲間に加わらない。加わることができないのである。ジョバンニは家にも帰らず、町を三つ曲がったところにある大きな活版所に行き、活字を拾うアルバイトをする。午後の授業を終えた後、すぐ走って行き、六時過ぎまでというから、労働時間は三時間ぐらいになる。ここでは「小さなピンセットでまるで粟粒ぐらゐの活字」を「何べんも眼を拭ひながら」拾うのだ。きびしい労働である。テクストには「青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、／「よう、虫めがね君、お早う。」と云ひますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらひました」との一文も挿入されている。ジョバンニは嘲笑されているのである。「声もたてずこつちも向かずに冷くわらひました」には、活字労働者の忙しさと、人のことなどかまっていられないという雰囲気も伝わる。ジョバンニは、教室では授業にうまく参加できず、放課後もアルバイトのため仲間と行動を共に出来ない、さらにはアルバイト先の活版所では、活字工たちから「冷たく」笑われているのである。ジョバンニの孤独の背景は、次の「三、家」の章で、より顕在化される。

「三、家」の章は、「ジョバンニが勢よく帰ってきたのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆ひが下りたまゝ、なつてあました」にはじまる。「三つ並んだ入口」とあるから、三軒長屋の一つがジョバンニの家であつたようだ。ケールはキャベツの一種の青野菜である。観葉植物の「葉ぼたん」とする説もあるが、貧しい長屋住まいのジョバンニの家からすると、青野菜とした方がよい。アスパラガスは言うまでもなく、今では常食野菜である。が、当時は珍しい野菜であつたはずだ。植物に詳しくあつた賢治のテクストにふさわしい扱いだ。この章は、ジョバンニとその母親との対話で進行する。

「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかつたの」というジョバンニのことばから、母と子の対話にはじまる。「いま帰つたよ」の「いま」は、夕方六時をはるかに過ぎた時間である。ジョバンニは「六時をうってしばらくたつたころ」まで、活版所で活字拾いのアルバイトをしていたのだから、帰宅はさらに遅れるので、六時半頃であつたに違いない。初夏の候なので、外はまだ明るい。ジョバンニの母は病んでいる。その母をいたわり、ジョバンニは帰宅早々母の病を心配しているのだ。それに対して母は、「あゝ、ジョバンニ、お仕事がひどかつたらう」と、まずはジョバンニの様子を問い、次に「今日は涼しくてね。わたしはずうつと工合がいゝよ」と答えている。続いての親子の対話の中では、結婚し、近くに住んでいるらしい姉がいて、母の日の中の面倒をみている様子が扱われる。姉が作ったトマト料理とパンを食べながらジョバンニと母との対話が続く。父と友人カムパネルラを話題とした対話は、以下のように展開

する。父の不在とカムパネルラとの関わりにふれた大事な箇所である。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰ってくると思ふよ。」

「あゝ、あたしもさう思ふ。けれどもおまへはどうしてさう思ふの。」

「だつて今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」

「あゝ、だけどねえ、お父さんは漁へ出てゐないかもしれない。」

「きつと出てゐるよ。お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で「以下教文字分空巨」お父さんはこの次はおまへにラッコの上着をもつてくるといつたねえ。」

「みんながぼくにあふとそれを云ふんだ。」

「おまへに悪口を云ふの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云はない。カムパネルラはみんながそんなことを云ふときは気の毒さうにしてゐるよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちやうどおまへたちのやうに小さいときからのお友達だつたさうだよ。」

「あゝ、だからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへも

つれて行つたよ。あのころはよかつたなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄つた。カムパネルラのうちにはアルコルラムプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついてゐて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるやうになってゐたんだ。いつかアルコルがなくなつたとき石油をつかつたら、缶がすつかり煤けたよ。」

「さうかねえ。」

ここでは、まずジョバンニの父の不在が話題にされる。父は北海で漁を仕事としている。長く家を空けているのであつた。が、母親は「お父さんは漁へ出てゐないかもしれない」という。それに対してジョバンニは、「監獄へ入るやうなそんな悪いことはしてない」と言う。やや唐突に父と監獄のことが出て来るが、草稿の第三次稿テキストには、「ジョバンニのお父さんは、そんならつこや海豹をとる、それも密漁船に乗つてゐて、それになにかひとを怪我させたために、遠くのさびしい海峡の町の監獄に入つてゐるといふのでした」との具体的説明がある。続いて、ジョバンニの父はカムパネルラの父と、「小さいときからのお友達」であつたため、以前ジョバンニは父に連れられて、その家に遊びに行つたことなどが回想される。

ジョバンニは、朝の新聞を配達している。カムパネルラの家にも配達している。夕方の活版所での活字拾いとあわせ、二つのアルバイトをし、彼は家計を助けているのであつた。ここまで読んで読み手は、「一、午後の授業」でのジョバンニの孤独や、自信を失い、

授業に入っていけない状況が理解できる。朝夕のアルバイトで疲れ、授業どころではなかったのである。

母親の「今夜は銀河のお祭だねえ」のことは触発されて、ジョバンニは「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ」と言い、出かけようとする。母の牛乳が届いていないので、取りに行くついでに見てくるのである。ジョバンニは「一時間半で帰ってくるよ」と言つて、「暗い戸口」を出る。「暗い戸口」は、ジョバンニのさびしく、やり切れない気持ちとオーバードラップする。

ジョバンニの孤独、いや衰しみがいつそう深まるのは、友だちとのかかわりにおいてである。「四、ケンタウル祭の夜」は、いじめっ子ザネリ、それにジョバンニにとつてのあこがれの少年カムパネルラとの対応が描かれる。この章は「ジョバンニは、口笛を吹いてゐるやうなさびしい口付きで、檜のまっ黒にならんだ町の坂を下りてきたのでした」にはじまる。「口笛を吹いてゐるやうなさびしい口付き」という表現に、その孤独の形象が読み取れる。例のザネリが暗い小路から街燈の下に突然現れ、ジョバンニとすれちがう。その時の様子は、次のように描かれる。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまださう云つてしまはないうちに、「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるやうにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るやうに思ひました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがも

うザネリは向ふのひばの植った家の中へはいってゐました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのだらう。走るときはまるで鼠のやうなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ。」

らっこはアイヌ語である。イタチ科動物で体長一メートル余、毛皮がコートとして人気があるため乱獲され、一九一一（明治四四）年に捕獲が禁止され、保護動物に指定された。が、密漁が多かったという。賢治作品では「氷河鼠の毛皮」（岩手毎日新聞）一九二三・四・二五）にも、らっこは上等の外套となる動物として出て来る。

ザネリは典型的ないじめっ子である。子どもの社会には、いつの時代にもどこにも必ずこういう子は出現する。宮沢賢治はいじめに敏感な作家であった。いじめを扱った作品は数え上げられないほどある。が、残念ながら『新宮澤賢治語彙辞典』にも、『宮沢賢治大事典』にも「いじめ」の項目はない。わたしは前著『賢治童話を読む』<sup>⑤</sup>で、いじめ問題を常に意識して論をつづつた。索引として抽出した項目には、いじめ・いじめの構図・いじめの実態・いじめ物語・いじめ問題などがある。実際に賢治テクストを調べると、いじめは作の構成要素として浮上するケースが、きわめて多い。「双子の星」「よだかの星」「猫の事務所」「雁の童子」「祭の晩」「虔十公園林」「フランドン農学校の豚」「風の又三郎」「セロ弾きのゴーシュ」など、すぐに思いつく。「銀河鉄道の夜」もまた、いじめがテクストの重大要素となつているのである。

ザネリはいじめっ子として、ジョバンニの心を波立たせる役割を担う。「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着がくるよ」のこ

とばに込められた、棘とげはなにか。それはジョバンニが「三、家」の章で、「お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がないんだ」と母親に返答したことはと響きあう。第三次稿では、先にも引用したように、ジョバンニの父親は「密漁船に乗って」らっこや海豹をとっているというわさがあり、「ひとを怪我させたために、遠くのさびしい海峡の町の監獄に入っている」とされていた。ザネリはとかくジョバンニをからかい、その心を傷つけているのである。

むろん、ザネリのからかいは、はじめとして特別にひどいというものではなからう。子どもの世界では、相手に配慮しない残酷なことはよく発せられるからだ。が、ジョバンニの置かれた境遇は、それが鋭い矢として彼の胸に刺さるのである。悲しみの形容をテクストは、「ジョバンニは、ぱっと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るやうに思ひました」と表現する。この表現は「猫の事務所」におけるかま猫の悲しみを、「かま猫はもうかなしくて、かなしくて頬ほほのあたりが酸っぱくなり、そこらがきいんと鳴つたりするのをじつとそこらへうつつむいて居りました」に通じる。悲しみのため「そこら中きいんと鳴る」とは、巧みな表現だ。

ジョバンニのザネリを評したことは、——「走るときはまるで鼠のやう」という一句に、ザネリのぬかりないやり方や、人を出し抜くような性格まで連想することができる。ザネリは子どもの世界の、いや、人間世界と言った方がよいか、どこにもいる悪賢い人物である。あえて言うなら、イエスを銀30枚で売ったユダ的人物だ。ザネリの存在があつてはじめてジョバンニは、人生の哀しみを深く体験することができるのである。次にジョバンニは、町の時計屋の

店で「黒い星座早見」を見出す。後の銀河鉄道の旅の伏線となる箇所である。引用する。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまはすと、そのとき出てゐるそらがそのまゝ、「楕」円形のなかにめぐってあらはれるやうになつて居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむつたやうな帯になつてその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげてゐるやうに見えるのでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立つてゐました。しいちばんうしろの壁には空ぢ「ゆ」うの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶びんの形に書いた大きな図がかかつてゐました。ほんたうにこんなやうな蜘蛛くまごだの勇士だのそらにぎつしり居るだらうか、あゝぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立つて居ました。

銀河鉄道への夢がふくらむところだ。最初はカムパネラの家でカムパネラといつしよに読んだ雑誌でジョバンニは銀河を知つた。次に学校の教室で、理科の授業として銀河を学んだ。そしていま時計屋の星座の図で、ジョバンニは銀河を確認したのである。

ジョバンニはここで母の牛乳のことを思い出し、牛乳屋へ行くことになる。町を行く子どもらは新しい折のついた着物を着て、星めぐりのうたの口笛を吹いたり、「ケンタウルス、露をふらせ」と叫んで走つたり、マグネシアの花火を燃やしたりして遊んでいる。

ジョバンニの気持ちは、そうした祝いの席から遠く離れている。「けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考へながら、牛乳屋の方へ「急ぐのです。」には、ジョバンニの孤独が投影している。

町はずれの牛乳屋でジョバンニは、牛乳が配達されなかったので、貰いに来たと言う。が、「どこか工合が悪いやう」な女の人は、「いま誰もゐないでわかりません。あしたにして下さい」として、はじめはとりあつてくれない。母が病氣であることを言うと、「ではもう少したつてから来てください」とのことなので、ジョバンニはお辞儀をして店を出る。牛乳屋はジョバンニの夢への導人的役割を果たすので大事な存在だ。店を出たジョバンニは、烏瓜の燈火を持った級友たちに会う。「ジョバンニは思はずどきつとして戻らう」とするが、「思ひ直して、勢よく」歩いて行き、「川へ行くの」と言おうとして、のどが詰まったように思った時、ザネリがまた「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ」と叫ぶ。他の同級生も続く。ジョバンニの辛い思いは、次のように描かれる。

ジョバンニはまっ赤になつて、もう歩いてゐるかもわからず、急いで行きすぎやうとしましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは氣の毒さうに、だまつて少しわらつて、怒らないだらうかといふやうにジョバンニの方を見てゐました。

ジョバンニは、<sup>に</sup>遁げるやうにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかへつて見

ましたら、ザネリがやはりふりかへつて見てゐました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向ふにぼんやり見える橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。ジョバンニは、なんとも云へずさびしくなつて、いきなり走り出しました。

ザネリの嫌がらせは、級友全体に波及し、みなが口をそろえて「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ」と言うに及び、ジョバンニの哀しみ、孤独感はピークを迎える。

### 三 ジョバンニの夢

ジョバンニはこれまで見てきたように、うぶな少年である。父は北方海域で漁に携わつてゐるはずなのであるが、なかなか歸つてこない。うわさでは、牢に入つてゐるともいう。「お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がない」とジョバンニは打ち消す。が、ザネリや他の級友までも、そのうわさを信じ、「らつこの上着が来るよ」と言つては歸つてこない父親を暗に揶揄し、ジョバンニをいじめる。母親は病氣で床に伏してゐる。

ジョバンニは父親不在のため、また、母の病氣ゆえ、貧しい生活を余儀なくされる。同じクラスの仲間や子どもたちが、「みんな新しい折のついた着物を着て」祭に行くのに対し、ジョバンニはそれができない。第三次稿「初期形」には、「たのしいケンタウルス祭の晩なのに、ジョバンニはぼろぼろのふだん着のまま」とある。彼は朝は新聞配達のアルバイトを、そして授業の終わった午後から

夕方六時過ぎまでは、活版所で活字拾いをしている。仕事がついで、授業はおろそかになっている。かつてはあんなに親しくしていたカムパネラともこの頃は遊ぶこともない。

一方、カムパネラの父は「博士」で、「書齋」のある大きな家に住む。ジョバンニの父とは、「小さいときからのお友達」である。その関係でジョバンニは、カムパネラの家によく行つては遊んだ。ジョバンニは母との対話の一節で、カムパネラとのかかわりを語っていた。すでに引用したところに含まれるが、「お父さんはぼくをつれてカムパネラのうちへもつれて行つたよ。あのころはよかつたなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネラのうちに寄つた。カムパネラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついてゐて信号標のあたりは汽車が通るときだけ青くなるやうになつてゐたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、缶がすつかり煤すすけたよ」という箇所だ。この箇所を見てもカムパネラの家は経済的に恵まれ、「アルコールランプで走る汽車」を子どもに与えることさえできたのである。

カムパネラは「せいの高い」子である。また、教室では先生の質問に真っ先に手を挙げる優秀な生徒であつた。仲間の中では人気があり、彼を中心として同じ組の者が集まる。祭の日の「烏瓜を取りに行く相談」も、「校庭の隅」に生い茂る「桜の木」の下で、カムパネラをまん中に相談がされる。カムパネラはジョバンニに同情的である。それは冒頭の「一、午後の授業」に早くも現れていたのを想起したい。先生の問に答えられないジョバンニに対し、カムパネラは同調する。「ではカムパネラさん」の先生の名指し

に彼は、「もじもじ立ち上がった」つたものの、答えない。ジョバンニを意識したことであつた。また、ケンタウルス祭の夜には、みんなからかわれてゐるジョバンニを見て、「気の毒さうに、だまって少しわらつて、怒らないだらうかといふやうにジョバンニの方を見て」いる。カムパネラは配慮があり、弱者への同情が持てる少年なのである。それが物語後半の悲劇を呼ぶ。

カムパネラはジョバンニにとつて、あこがれの存在であつた。それだけに、ユダ的存在のザネリなどといつしよにいるカムパネラに対し、許せない思いを懐く。父と一緒に生活してゐたころは、学校帰りにたびたびカムパネラの家に入り、遊んだのに、いまはアルバイトに忙しくてできない。カムパネラの眼は依然ジョバンニに同情的である。が、ジョバンニは「遁げるやうにその眼を避け」る。カムパネラの一団は、口笛を吹いて橋の方へ歩いていく。「四、ケンタウルス祭の夜」は、以後展開する物語の伏線が、いくつか巧みに張られてゐる章なのである。

「五、天気輪の柱」は、四次稿でたつた三枚の章である。章立てタイトル名の「天気輪」とはなにか。『新宮澤賢治語彙辞典』には、「賢治の描写が具体性を欠くため諸説がある」として、数説を紹介している。中でもっとも根拠のありそうなのは、東北地方の風習ともかわる地蔵車説である。それは村境や寺や墓地に柱を立てて、農業に影響のある天候を祈るものであつて、お天気柱・天気輪の塔とも言う。石造りの柱が多い。賢治はそうした地域に見られる一寸した遺物に目をとめ、物語の展開に巧みに用いてゐるのだ。五の章は、「黒い丘」である天気輪の柱に向かつてジョバンニの姿から書き起こされる。以下のようになつてゐる。

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えませんでした。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどんのぼつて行きました。まっくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らされたのでした。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もゐて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さつきみんなの持つて行った烏瓜のあかりのやうだとも思ひました。

そのまっ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘つてゐるのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねさうか野ぎくかの花が、そこらいちめん、夢の中からも薫りだしたといふやうに咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジョバンニは、なぜ「黒い丘」に向かったのだろうか。ジョバンニも子どもだから「銀河のお祭」を見たかつたに相違ない。事実、彼は家を出る時、母と祭の話をしていた。「ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」／「あ、行つておいで。川へははいらないでね。」／「あ、ぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ。」という対話があったことを思い出す。ジョバンニも他の級友とともに川へ行き、「烏瓜のあかり」（烏瓜の小さな提灯）を流したかつたに相違

ない。が、活版所でのアルバイトがあつて、放課後の烏瓜捜しに参加できなかつた。当然「烏瓜のあかり」も持つていない。だから「岸から見るだけ」にしたいと考えていたのだ。

それが途中で「烏瓜のあかり」を持つた級友に会い、またまた、「らつこの上着が来るよ」の合唱でひやかされ、すっかり気落ちし、川へ行くのが嫌になつてしまふ。そこでジョバンニは、天気輪のあ「ゆるい丘」へと向かつたのである。そこは「天の川がしらしらと南から北へ亘つてゐるのが見え」る場所で、頂上は「北の大熊座の下」にある。級友から、そしてカムパネルラからも疎んじられたと思つたジョバンニは、ひとり星の祭を楽しむために、星座のよく見える天気輪の立つ丘を選んだことは、理解できることだ。ジョバンニの孤独は、ここにきてクライマックスを迎える。いまま少しテクストを引用しよう。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのやうにとり、子供らの歌ふ声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしづかにそよぎ、ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはづれから遠く黒くひろがつた野原を見渡しました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらつたり、いろいろな風にしてゐると考へますと、

ジョバンニは、もう何とも云へずかなしくなって、また眼をさらに挙げました。

ジョバンニは、いま孤独の真中にいる。彼はザネリをはじめとする意地の悪い級友たちから、町の十字路で一種の魔女裁判を受けていた自身を想起すると、やり切れない思いにとられるのであった。ジョバンニは何らの言い訳もしなかった。否、できなかった。ただ言いようもなく寂しかったのである。ザネリをはじめとする仲間、冷たい視線、その上、尊敬し、信頼していたカムパネルラからさえも、憐れみの目で見下げられるほど、彼は孤立していた。

ジョバンニは級友と放課後の交わりを持ちたくとも、その暇はなかった。活版所のアルバイトは、彼から級友と交わる時間を奪っていた。教室での授業では、前のように自信を持って手を挙げることも出来ず、先生からさえ不審の目を持って眺められる始末であった。彼は孤立せざるを得なかったのである。ジョバンニは無性に寂しかった。川に行き、カムパネルラやザネリをはじめとする級友が、「烏瓜のあかり」を流すのに加われなくとも、せめて「岸から見る」ことにしようと考えていたのだが、それも途中で烏瓜の灯火を持ったザネリらに会い、父のことでひやかされ、その氣を失ってしまう。彼の行くところは、地上の川でなく、天の川きりなかつたのである。

かくてジョバンニは、天の川に近い「黒い丘」へと急いだ。丘の頂の「天気輪の柱」の下に体を休めたジョバンニは、下に広がる町の様子を眺める。眺めているうちに列車の近づく音が聞こえてくる。現実がファンタジーへと移行する先触れである。丘の上の天気

輪の柱は、現実世界と夢の世界とを結ぶもの、つまりファンタジーという異空間への入口、そして出口の役割を担わされていたかのようだ。すでに上田哲も指摘しているように、「銀河鉄道の夜」は、天気輪の柱によって境された異空間を舞台に展開される部分が、最も重要」としてよいのである。

「六、銀河ステーション」は、天気輪の変貌にはじまる。冒頭には、「そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく螢のやうに、べかべか消えたりともったりしてゐるのを見ました。それはだんだんはつきりして、たうたうりんとうごかないやうになり、濃い鋼青のそらの野原にたちました」とある。天気輪の柱が「三角標の形」になるというのは、測量に際して山頂に築く櫓を連想させる。これは三角法を応用して行うもので、各点を三角網でつないで行う。精度が高いとされる測量である。

さて、ジョバンニはいつの間にか夜の軽便鉄道（銀河鉄道）に乗っている。どこかで不思議な声が、「銀河ステーション、銀河ステーション」と叫んでいる。すると、いきなり「眼の前がさあつと明るく」なる。光の洪水である。気がつくると列車の前の席には、カムパネルラも乗っている。その箇所を引用する。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗ってある小さな列車が走りつづけてゐたのでした。ほんたうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のなんだ車室に、窓から外を見ながら座つてゐたのです。車室の中は、青い天鵞絨を張った腰掛けが、まるでがら明きで、

向ふの鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮しんちゆうの大きなぼたんが二つ光つてゐるのでした。

すぐ前の席に、ぬれたやうにまっ黒な上着を着た、せいの子供が、窓から頭を出して外を見てゐるのに気がつきました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるやうな気がして、さう思ふと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出さうとしたとき、俄かにその子供が頭を引つ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジョバンニが、カムパネルラ、きみは前からこゝに居たの云はうと思つたとき、カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走つたけれども遅れてしまつたよ。ザネリもね、ずるぶん走つたけれども追ひつかかなかつた。」と云ひました。

ジョバンニは、(さうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそつて出掛けたのだ。)とおもひながら、

「どこかで待つてゐやうか。」と云ひました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰つたよ。お父さんが迎ひにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかさう云ひながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいといふふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるといふやうな、かかしな気持ちが出てしまつてしまひました。

この箇所は、カムパネルラがザネリを助けようとして水死したという事件の伏線である。「ぬれたやうにまっ黒な上着を着た、せいの子供」とは、カムパネルラであることは、すぐ後の記述でもはつきりする。「ぬれたやうに」は、カムパネルラの水死を暗示し、「まっ黒な上着」が不吉なイメージであることも、やがて理解できよう。「みんなはねずいぶん走つたけれども遅れてしまつたよ。ザネリもね、ずるぶん走つたけれども追ひつかかなかつた」にも、カムパネルラ一人の水死の様子を思わせることは、散りばめられている。

ジョバンニは、級友カムパネルラと銀河鉄道に乗り合わせている。鉄道は賢治の好んで用いた作品舞台であつた。「月夜のでんしんばしら」「氷河鼠の毛皮」「シグナルとシグナレス」などが、すぐ想起される。

小沢俊郎は「銀河鉄道の夜」を論じて、「鉄道というのは簡単にいつて人生の縮図みたいなもの」と言う。確かに鉄道は、そうした側面をもつ。まして、鉄道が最先端の文明であつた時代である。鉄道は人々のあこがれの対象でもあつた。ジョバンニはいまあこがれの対象である鉄道列車に、あこがれの友、カムパネルラと乗り合わせているのだ。町の十字路で話もせず別れたカムパネルラと、いまジョバンニはいっしょに乗り合わせている。孤独なジョバンニの歡びは、カムパネルラから「円い板のやうになつた」星座地図(星座早見)を示されるところで、頂点に達したかのようである。地図には「一条の鉄道線路が、南へ南へと」続く。そこには「一一の停車場や三角標、泉水や森」が描かれている。以下にテキストを引用する。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジョバンニが云ひました。

「銀河ステーションで、もらつたんだ。君もらはなかつたの。」

「あゝ、ぼく銀河ステーションを通つたらうか。いまぼくたちの居るところ、ここだらう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「さうだ。おや、あの河原は月夜だらうか。」そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすゞきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆれてうごいて、波を立ててゐるのです。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云ひながら、まるでね上りたいくら愉快になつて、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きはめやうとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとほつて、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のやうにざらつと光つたりしながら、声もなくどどん流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立ってゐたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或ひは三角形、或ひは四辺形、あるひは電や鎖の形、さ

まざまにならんで、野原いっぱい光つてゐるのです。ジョバンニは、まるでときどきして、頭をやけに振りまわした。するとほんたうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかゞやく三角標も、てんでに息をつくやうに、ちらちらゆれたり顛へたりしました。

ジョバンニは、カムパネルラといふことであれしくてたまらないのである。ジョバンニの歡びは、「はね上りたいくら愉快になつて、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きはめやうとしました」の一文によく示されている。そうした歡びを表現する情景描写も見事で、自然と人事の一体化した描き方は素晴らしい。

銀河鉄道の乗物は、石炭で走るのではない。ジョバンニが「この汽車石炭をたいてゐないねえ」という問に、カムパネルラは「アルコールか電気だらう」と答える。公害のない乗物として銀河鉄道は想定されているのだ。それゆゑ銀河鉄道の乗物は、石炭の煤で汚れた乗物ではない。それは「小さなきれいな汽車」である。二十一世紀の無公害車を先取りした乗物といえよう。「そのすゞきの風にひるがへる中」を、汽車はどこまでもどこまでも走つて行く。銀河鉄道の旅は、少年ジョバンニの夢であつた。それは北十字とされる白鳥座にはじまり、南十字に至る異空間の旅である。ジョバンニは愛するカムパネルラとの夢の旅を通して、孤独は次第に癒されていく。

#### 四 「ほんたうの幸」とは

「銀河鉄道の夜」の「七、北十字きたじゆうじとプリオシン海岸」は、「ほんたうの幸」をめぐってのカムパネラとジョバンニとの対話にはじまる。カムパネラが「思い切ったといふやうに」切り出すこの課題は、以後何度も問われることになる。ジョバンニとカムパネラ二人の銀河鉄道の旅の目的は、「ほんたうの幸」を求めての旅となる。「ほんたうの幸」とはなにか？

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか」とのカムパネラの自問は、綴友ザネリを助けようとして自身が溺死し、母を悲しめさせることになったことを暗示している。カムパネラは「泣きだしたいのを、一生けん命こらえてゐるやうでした」との語り手のことばもあるが、以後二人の《銀河鉄道の夜》は、「ほんたうの幸」を求めての旅となる。そしてカムパネラは「誰だれだって、ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ」とその決意を告げる。

ここで章題の一部に用いられた《プリオシン海岸》のプリオシンについて説明すると、プリオシン (Pliocene) とは、地質年代で言う第三紀を指す。約六五〇〇万年前から一八〇万年前までの時代である。哺乳動物が栄え、火山活動が盛んで、アルプスやヒマラヤなどの山脈ができ、日本列島などもこの時代に形づくられたという。賢治は「イギリス海岸」や「青木大学士の野宿」にも、この時代のことをとりあげている。「銀河鉄道の夜」では、天の川上の《プリオシン海岸》という見立てで物語を展開する。読んでいってまず気づ

くのは、そこにキリスト教的世界が大きく広がっていることである。次の引用を見てほしい。

俄にはかに、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたやうな、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射さした一つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるやうな、白い十字架がたつて、それはもう凍った北極の雲で鍍たといったらいゝか、すきつとした金いろの円光をいただいて、しづかに永久に立つてゐるのでした。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が始まりました。ふりかへつて見ると、車室の中の旅人たちは、みなまつすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をかけたたり、どの人もつつましく指を組み合せてそつちに祈つてゐるのでした。思はず二人もまつすぐに立ちあがりました。カムパネラの頬は、まるで熟した苹果りんごのあかしのやうにうつくしくかゝやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつて行きました。

向ふ岸も青じろくぼうつと光つてけむり、時々、やつぱりすすぎが風にひるがへるらしく、さつとその銀いろがけむつて、息でもかけたやうに見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火きびきのやうに思はれました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさへぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、ちきもうずうつと遠く小さく、絵のやうになつてしまひ、またすゝきがざわざわ鳴つて、たうたうすつかり見えなくなつてしまひました。ジョバンニのうしろには、いつから乗つてゐたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じつとまつすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そつちから伝はつて来るのを、うらんで聞いてゐるといふやうに見えました。

「銀河鉄道の夜」は、北十字ノザンクロスとされる白鳥座にはじまり、南十字サザンクロスに至る異空間の旅であることは先に指摘した。ここに「白い十字架」が登場し、テクストはキリスト教の世界に次第に染め上げられていく。さらに「ハルレヤ、ハルレヤ」の声が起る。「ハルレヤ」でなく、「ハルレヤ」であることに注意したい。ハルレヤの原語はヘブライ語で、神を讚美しなさい、の意味である。旧約聖書の「詩篇」に、このことばはしばしば登場する。「詩篇」一一三―一一八は、一般に「ハルレヤ詩篇」と呼ばれるほどこのことばの繰り返しが多い。新約聖書の「ヨハネの黙示録」十九章の「ハルレヤ、全能者であり、わたしたちの神である主が王となられた」は、ヘンデル作曲『メサイア』の「ハルレヤ・コーラス」の基になつた句である。かつての十字屋書店版全集（一九三九）や筑摩書房版全集（一九五六）では、「ハルレヤ」を誤記として「ハレルヤ」に置き換へたこともあったが、現在では『校本宮澤賢治全集』以後すべて「ハルレヤ」に戻している。『校本全集』の校異には、賢治は一度「ハレ

と書きかけ、「レ」を削除し「ハルレヤ」と改めているとある。自筆原稿を見ての記述である。写真原稿からしても、そのことは歴然としている。『新宮澤賢治語彙辞典』は、「ハルレヤ (Hallaljah) をもじつた賢治の造語か」とし、「銀河鉄道の夜」では、車中の旅人たちが、北十字到着と南十字到着の時に「ハルレヤ、ハルレヤ」と唱和するが、このコーラスは、この作品のもつ十字架から十字架へというキリスト教的イメージの一端を彩つている」とある。

なお、辻千鶴は、あるコラム欄で「ハルレヤ」は「ハルレヤ」によく似ている。人々が、その言葉を讚美し感激しながら唱えている様子は「ハルレヤ」の使われ方と同じである。しかし、「ハルレヤ」は「ハルレヤ」ではない。つまり車中の人々の宗教はキリスト教によく似ているが、現実のキリスト教と全く同じには書かれていない。これは現実とはちがう虚構の「幻想第四次の銀河鉄道」の世界を描くためのアイデアだつたと思われる」との指摘をしている。が、「ハルレヤ」は、芥川龍之介も「尾形了齋覚え書」〔『新潮』一九一七・一〕で、「はるれや」と平仮名表記で用いている用語でもある。例えば「空に十字を描き候うては、頬にはるれやと申す語を、現の如く口走り」とか、「手に手に彼くす、乃至は香炉様の物を差しかざし候うて、同音にはるれや、はるれやと唱へ居り候」との文例を示すことができる。この小説中では、「はるれや」と申し候は、切支丹宗門の念仏にて、宗門仏に讚頌を捧ぐる儀」と説明されている。すると賢治は、芥川同様の南蛮文学書（吉利支丹文書）にふれていたのであろうか。平岡敏夫は「尾形了齋覚え書」における「はるれや」は、「はるれや」が子供あるいは日本化、地方化でなまつたのだろう」とする。けれども、わたしには賢治の「ハ

ルレヤ」と併せ、何らかの南蛮文学書からの転用と考えるのが自然と思われる。いずれその典故を明らかにしたいが、今はここまできり言えない。それにしても「ハルレヤ」の声は、キリスト教の「ハレルヤ」を踏まえていることは、否定できまい。

島の「白い十字架」に、車中の人々は立ち上がり「黒いバイブル」を胸に当てたり、水晶の数珠をかけたり、つつましく指を組み合わせ、祈っている。白と黒の対比に、人間の永遠の課題を託しているかのような。ジョバンニとカムパネルラの二人も思わず立ち上がる。銀河と汽車との間はすずきの列でさえぎられ、白鳥の島は遠く。旅人たちは静かに席に戻り、二人も、「胸いっぱいのかなしみに似た新しい気持ち」を何気なく、そっと話し合う。その内実は記されていない。白鳥の停車場は近づき、やがて列車は、停車場の大きな時計の前に来てとまる。時刻は十一時である。「二十分停車」と時計の下には書いてある。

二人はここで一時下車する。先に降りた人たちはどこへ行ったか、一人も見えない。二人は汽車から見えたきれいな河原に行く。そこには、「プリオシン海岸」の標札があり、五、六人の人が遺跡の発掘に携わっている。大学士らしい人が「くるみが沢山あったらう。それはまあ、ざっと百二十万年前、第三紀のあのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れてゐるところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりしてゐたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、」と説明してくれる。『新宮澤賢治語彙辞典』には、プリオシン海岸を賢治の「イギリス海岸」という随筆的作品と結びつけ、「イギリス海岸のくるみの化石出土のイメージと、天の川Ⅱ北上川の水の流れが結びついて、天の川上のプリオシ

ン海岸が成立することになる」とするが、賢治の想像力は、現実の北上川のイギリス海岸に立脚していたのである。

第三紀のプリオシン海岸を持ち出したことで、賢治の夢と現実は交差する。もともと「銀河鉄道の夜」は、夢と現実のあわいに成り立っているテキストなのである。「もう時間だよ。行こう」というカムパネルラのことばで、ジョバンニは大学生に丁寧にお辞儀をして、汽車に遅れないよう白い岩の上を走る。その状況をテキストは、「ほんたうに、風のやうに走れたのです。息も切れず膝もあつくなりませんでした。／こんなにしてかけるなら、もう世界中でつけられると、ジョバンニは思ひました」と示す。ジョバンニの夢の世界、異空間の一コマを表現するにふさわしいレトリックだ。

続く「八、鳥を捕る人」は、車中風景にはじまる。「ここへかけてもようございますか」という「大人の声」が、二人のうしろで聞こえ、「赤髯のせなかのかがんだ人」が来る。その人は「茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛け」ている。彼は「鳥をつかまへる商売」をしている。ひげの中でかすかに笑う人を前に、ジョバンニはその仕事を知る前から「なにか大へんさびしいやうなかなしいやうな気」がしている。ジョバンニの感性が対象に敏感に反応しているのである。商売が鳥とりであることを明かしたその人は、何の鳥を捕るのかの少年たちとの間に、「鶴や雁です。さぎも白鳥もです」と答えている。鳥捕りと二人の少年は、以下のような会話をする。

「鶴はたくさんゐますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかったのです

か。」

「いゝえ。」

「いまでも聞えるぢやありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんさい。」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くやうな音が聞えてくるのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジョバンニは、どつちでもいいと思ひながら答へました。

「そいつはな、雑作ざさくない。さぎといふものは、みんな天の川の砂が凝こって、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待つてゐて、鷺がみんな、脚をかういふ風にして下りてくるとこそ、そいつが地べたへつくかつかないうちに、びたつと押へちまふんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んぢまひます。あとはもう、わかり切つてまさら。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本ぢやありません。みんなたべるぢやありませんか。」

不思議なことを言う鳥捕りに、カムパネルラは「おかしいねえ」と首をかしげる。すると男は、「おかしいも不審もありませんや。そら」と立つて、網棚から包みをおろして中身を示す。鷺は平べったくなくて、浮き彫りのように並んでいる。鷺はおいしいのかとい

うジョバンニの間に、毎日注文がある、しかし雁の方が柄がよく、もつと売れると言ひ、別の包みを解き、鷺と同様くちばしをそろえ、少し平べったくなつた雁を見せる。「どうです、少しおあがりなさい」と鳥捕りは言ひ、雁の足を軽くひっぱると、きれいにはがれる。ジョバンニはちよつと食べてみて、「チヨコレートよりも、もつとおいしい」と思う。

鳥捕りは、職業としては猟師である。その仕事の内容は、生き物である鳥を捕獲し、加工して売る仕事である。その意味でここに出て来る男は、同じ賢治作品の「なめとこ山の熊」の主人公、すがめの淵沢小十郎なども重なるところがある。また、他の生き物を殺してまでもこの世に生きなくてはならないという点では、「よだかの星」の主人公よだかとも重なる。ここに原罪の問題が浮上する。

後の章になるが、「ほんたうの幸せ」に思いをいたすジョバンニが、次のような思いを懐くのを、先取りして示しておく必要があるだろう。「九、ジョバンニの切符」のはじめの方に、鳥捕りとジョバンニの語らいがある。次の「鷺の駅」に着く寸前のジョバンニの思ひで、ジョバンニの成長が語られる箇所である。

ジョバンニはなんだかわけもわからずにはかにとなりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺をつかまへてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびつくりしたりやうに横目で見てあはて、ほめだしたり、そんなことを一一考へてゐると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持つてゐるものでも食べるものでもなんでもやつてしまひたい、もうこの人のほんたうの幸に

なるなら自分があの光る天の川の河原に立つて百年つゞけて立って鳥をとってやってもいゝといふやうな気がして、どうしてももう黙ってゐられなくなりました。ほんたうにあなたのほしいものは一体何ですか、と訊かうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうせうかと考へて振り返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかつたのです。また窓の外で足をふんばってそちを見上げて鷺を捕る支度をしてゐるのかと思つて、急いでそちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすゝきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖つた帽子も見えませんでした。

鳥捕りは、自身が生きるために生き物である鳥をつかまえ、加工して売る。それは「よだかの星」でのよだがが、知らずにいたとはいえ、小さな羽虫や甲虫を食べることで生きていたのと同様である。いづれにせよ、それは悲しい現実、——原罪の世界としかいえないような現象である。生まれながらにして負っている罪、そのことにジョバンニは思い至っている。

鳥捕りの不幸を思いやるジョバンニ、——この問題は、わたしの『賢治童話を読む』の主要なテーマともなる。弱者への眼である。このあとすぐに出て来る苹果によって象徴される原罪問題と合わせ、次章以下でも考えたい。

注1 原 子朗『鑑賞日本現代文学13宮沢賢治』角川書店、一九八一年六月二〇日、一四二ページ

2 西田良子「四つの「銀河鉄道の夜」改稿にみる創作意識の変化」  
西田良子編著『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む』創元社、二〇〇三年四月一〇日、二二六ページ

3 原 子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍、一九九九年七月二六日、三六一～三六二ページ

4 大貫 隆他編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、二〇〇二年六月一〇日、二五六ページ、「カンパネラ」の執筆は、浦一章である。

5 渡部芳紀編『宮沢賢治大事典』勉誠出版、二〇〇七年八月一〇日

6 関口安義『賢治童話を読む』港の人、二〇〇八年二月二四日

7 上田 哲『銀河鉄道の夜』賢治の異空間体験——萬田 務・伊藤 眞一郎編『作品論宮沢賢治』双文社出版、一九八四年七月一〇日、二六一ページ

8 小沢俊郎『小沢俊郎宮沢賢治論集1作家研究・童話研究』有精堂、一九八七年三月一四日、二二二ページ

9 辻 千鶴『ハルレヤ』は「ハレルヤ」か』西田良子編著『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む』創元社、二〇〇三年四月一〇日収録、一八九ページ

10 平岡敏夫「母を呼ぶ声——南蛮寺」から「点鬼簿 まで」』芥川龍之介と現代』大修館書店、一九九五年七月二〇日、一八六ページ

テクストは筑摩書房版『新校本宮沢賢治全集』第十一卷（一九九六・一・二五）初版第一刷）収録のものを用いた。ただし、読者の便を図り、一部の漢字に『新修宮澤賢治全集』第十二巻を参照し、ルビを施した。また、文字の入らない「」は省略した。